

# パーソナリティと同一性

岩熊史朗

**[要旨]** 本稿では、パーソナリティに関する理論を概観し、特に社会的構築主義の視点からパーソナリティ概念を検討する。パーソナリティは、伝統的なパーソナリティ理論では“行動の原因となる生物物理学の実体”、新相互作用論では“行動のスタイル・パターン”、社会的構築主義では“行動を説明するための理論”と位置づけられている。パーソナリティの語源となった“ペルソナ”は、劇中人物の同一性を維持する機能を持つ。相貌や名前は、日常生活におけるペルソナと見ることができる。ペルソナを記号と考えれば、パーソナリティはその“意味”に相当し、ペルソナの同一性を支える機能を果たす。パーソナリティの継続性と安定性は、ペルソナの同一性を強化する必要性から生じる。他者のペルソナの同一性が失われれば、われわれの世界の意味も失われることになろう。パーソナリティは、意味に相当するが、認識主体の中にあるのではなく、認識主体の外側のペルソナが存在する場所に存在すると見るべきであろう。伝統的なパーソナリティ理論は個人の広範囲の行動を統一的に説明することを目的とし、新相互作用論は状況とそこにいる行動主体との関係を解明することを目的としている。一方、社会的構築主義は、世界が意味づけられる過程を知るための手がかりとして、パーソナリティが構築される過程に注目している。さらに、パーソナリティは自己や他者の同一性を維持しているのである。

**[キーワード]** パーソナリティ、同一性、意味、社会的構築主義、特性論、新相互作用論

## 1 はじめに

「パーソナリティ(personality)」という言葉は、必ずしも日常的に頻繁に用いられる言葉ではない。簡単に言えば、「その人らしさ」「人となり」「人柄」といった意味合いを持っている。また、「性格」とほぼ同義で用いられることもある。以前は「人格」という訳語が用いられていた。しかし、例えば「人格者」といった表現にも見られるように、価値づけを含んでいるとして避けられるようになった。現在の心理学では、「パーソナリティ」とカタカナで表記されることが多い。

すべての人間はパーソナリティを持っており、すべての人間は少なくとも親密な他者や自分のパーソナリティに少なからず関心を持っている。というのも、他者や自己のパーソナリティを無視すれば、正常な人間関係は成立せず、結果的に、正常な社会生活を送ることはできないからである。そういう意味では、「パー

ソナリティ」という言葉自体は用いられなくとも、パーソナリティはわれわれにとって重要な意味を持っている。

もちろん、心理学においても、パーソナリティは重要な研究領域の1つとされている。それだけでなく、精神医学、哲学、社会学、文化人類学といった研究領域においても重視されてきた。また、歴史的に見れば、古代ギリシャでもパーソナリティの研究が為されており、その後も哲学者や神学者の関心の対象であり続けてきた。

それにも関わらず、パーソナリティの最終的な定義は未だに存在しない。多くの学者によって様々なパーソナリティの定義が生み出されたが、決定的なものはない。それどころか、ここ数十年間の心理学の状況を見ると、パーソナリティの捉え方は多様性は増している。

本稿は、多様なパーソナリティ概念を整理し、再検

討することを目的としている。結論を先取りして言えば、その際、キーワードとなるのが「同一性」という概念である。筆者は、他稿において、同一性の問題を考察したが、その中でもパーソナリティの問題に言及した(岩熊, 2002)。本稿では、さらに詳細にパーソナリティと同一性の問題に検討を加える。

## 2 パーソナリティの概念

ここでは、パーソナリティ研究において、特に重要な理論を紹介し、そこでパーソナリティ概念がどのように位置づけられているかを見る。さらに、それらの理論に含まれる問題点についても検討する。

### 2-1 伝統的なパーソナリティ概念

現代心理学において、パーソナリティの問題を初めて体系的に取り上げた人物の1人が、アメリカの心理学者Gordon W. Allportである。彼は、1937年に著書“*Personality: A psychological interpretation*”を發表し、これがその後のパーソナリティ研究に大きく影響を及ぼした。彼は、この中でそれまでに為されたパーソナリティの定義を検討した上で、彼独自の定義を作っている(Allport, 1937)。彼の定義は以下の通りである。

パーソナリティは、環境に対するその人独特の適応を決定する心身システムで構成される、個人内の動的組織である。(Allport, 1937, p. 48)

この定義は平易なものとは言い難いが、Allport自身が補足的に説明を加えているので、それを見ていくことにする(Allport, 1937 詫摩・青木・近藤・堀訳, 1982, pp.40-41)。まず、「環境に対するその人独自の適応」については、基本的には地理的環境、行動的環境を含めた環境に対する自発的、創造的な行動を含んでいる。彼は、晩年に再びパーソナリティに関する体系的な著書を發表するが、その中の定義では、この部分を「その人の特徴的な行動と思考」と改めている(Allport, 1961, p.28)。いずれにしてもパーソナリティが行動を決定することを意味している。

「心身システム」は、具体的には、習慣、態度、感情、傾

向などを指す。これらが完全に精神的なものでもなく、完全に身体的なものでもないことを示すために、「心身(psychophysical)」という言葉が用いられている。これらを要素としてパーソナリティは成立していることになる。

「個人内の」という言葉について、彼自身は特に説明を加えていない。彼は、パーソナリティが個人の内部に存在することを当然のことと考えていたようである。これについては、他の考え方もあり、争点となる部分であるため、後に再び取り上げることにする。

「動的組織(dynamic organization)」に関して彼は、パーソナリティが活動的な組織であり、常に進化し変化しているもの、動機づけられ、自己調整的なものとみなされるべきであると述べている。これは、パーソナリティの要素となるものを列挙する“総括的定義”を避け、パーソナリティを統合された1つの全体として見る姿勢の表れでもある。

Allport(1937)は、この定義に基づきパーソナリティ研究の方向性を示した。具体的には、パーソナリティの要素である心身システムを“特性”という概念で整理したのである。特性は、完全に個人の範囲内にあり、行動を決定する(行動に一貫性を与え、行動を行なわせる)能力を持つとされる(Allport, 1937 詫摩他訳, 1982, pp.254-255)。そして、これを調べることをパーソナリティ研究の中心に据えたのである。いわゆる特性論的なパーソナリティ研究がここから始まることになる。

Allport(1937)の定義には、他の定義と比較する上で重要な観点がいくつか含まれている。その1つは、先にも触れたパーソナリティの内在性である。パーソナリティが個人の内部に存在するという考え方は、伝統的なパーソナリティ理論に共通して見られる特徴である。また、われわれの日常的な感覚から見ても、そのように感じられる。しかし、その後の定義の中には、パーソナリティを個人の内部に位置づけられないものもある。

彼の定義の第2の特徴は、パーソナリティを実在的なものと見ている点である。彼は「心身システム」「動的組織」といった用語を用いて、個人内にこれらが実

的に存在していることを示唆している。また、彼はパーソナリティを認識とは無関係に自存するものと見ている。彼はロビンソン・クルーソーを例に挙げ、誰にも知られなくとも十分発達したパーソナリティを持っていると述べている(Allport, 1937 詫摩他訳, 1982, p.34)。つまり、パーソナリティは“生物物理学的な実体”とみなされているのである。

そして、第3の特徴は、パーソナリティを行動の原因と見る点である。1937年の定義では「適応を決定する」とされているため、必ずしも明確ではないが、1961年の定義では、「行動と思考を決定する」ものとして、明確にパーソナリティを行動の原因とみなしている。パーソナリティが行動の原因であるとするれば、パーソナリティを理解することで、個人の行動が予測できることになる。実際、多くのパーソナリティ研究者が行動を予測することを研究の目的としている。したがって、これはパーソナリティ研究の存在意義にも関わる問題ということになる。

Allport(1937)の定義のような影響力はないが、伝統的なパーソナリティ理論の考え方をよく表している定義を挙げておく。

1人の人物の行動を、ある時点と他の時点とで一貫させ、他の同等の状況において他の人々が示す行動と異なるものにする、多少なりとも安定した内的な要因。(Child, 1968, p.83)

この定義には、Allport(1937)の定義では必ずしも明確ではなかった伝統的なパーソナリティ理論の前提がよく示されている。その1つは、個人の行動の一貫性の問題である。われわれは、ある人物が行なった行動に対して「その人らしい行動だ」と感じることもある。これは、われわれが、その行動と過去のその人物の行動との間に一貫性を感じるからにほかならない。Allport(1937)も特性によって一貫性を説明しようとしている。一貫性は、伝統的なパーソナリティ理論において、不可欠な要素と言えよう。

第2点は個人差である。同じ状況であっても、人によって異なる行動をとることがある。もし行動に個人差がないのであれば、人間行動に関する一般法則さえ

あれば、個人の行動の予測ができることになる。そうならば、少なくとも行動を予測するという目的は、パーソナリティ研究から失われることになる。そのため、個人差の存在はパーソナリティ研究の大前提となっている。

第3点は、パーソナリティの安定性・持続性である。Child(1968)は、「多少なりとも安定した」と述べているが、実はここにパーソナリティ研究者の苦悩が現れている。パーソナリティが一貫性を産み出すためには、パーソナリティ自体が変化しないことが望ましい。また、パーソナリティが刻一刻と変化するようなものであれば、持続的に存在する個人と対応させるべきものではなくってしまう。しかしその一方で、パーソナリティが成長したり、変化するということは常識的な事実である。つまり、この表現は、この2つの見方の間の妥協案として生まれたものと言える。この表現は、定義自体を曖昧なものとするようになったが、ある意味では伝統的なパーソナリティ理論全般に内在する問題を表しているとも言えよう。

## 2-2 新相互作用論

特性論を中心とする伝統的なパーソナリティ理論は、1930年代から1960年代にかけて、パーソナリティ理論の中心となるが、1960年代の終わりに重大事件が起こる。それはMischel(1968)を契機として始まった“一貫性論争”あるいは“人間-状況論争”である。

Mischel(1968)は、それまでに為された多くの実践的な研究を検討した上で、伝統的なパーソナリティ研究において理論化され、測定されてきたパーソナリティ特性が、行動を予測する上で有効でないと主張した。彼は以下のように述べている。

知能は例外にできるとしても、高度に一般的な行動の一貫性は立証されていないし、パーソナリティ特性を広範な反応の先行傾性とみる概念も支持されていない。(Mischel, 1968 詫摩監訳, 1992, p.155)

彼は、行動主義の流れをくむ社会的学習理論の立場をとっており、行動の決定要因として、パーソナリティ特性などの個人内の要因よりも、環境内の先行刺

激を重視する。具体的に言えば、行動には状況特殊性があり、状況が行動を決定するという主張となる。この立場は「状況主義」と呼ばれることになる。

このような主張は、伝統的なパーソナリティ理論とは、真っ向から対立するものである。そのため、状況主義者とパーソナリティ研究者との間で、その後、長年にわたって論争が続けられることになった。しかしながら、伝統的なパーソナリティ理論の立場からは、状況主義の主張に対して有効な反論は為されず、パーソナリティ研究自体の存在意義も危機に瀕することになった。

このような状況の中で現れた新しい立場が、“新相互作用論(modern interactionism)”である。相互作用論とは、大まかに言えば、Lewin(1935)の“ $B=f(P \cdot E)$ ”という公式、即ち「行動(B)は、人(P)と環境(E)との関数である」という主張に代表されるような考え方を指す。つまり、行動の決定要因として個人内の要因と状況要因との両者を重視する立場である。ただし、一貫性論争以降に現れた新相互作用論では、単に両者を要因として取り上げるだけでなく、人と環境との相互作用に焦点を当てる。その際の相互作用の捉え方には、いくつかの異なる見解があるが(Krahé, 1992 堀毛訳編, 1996, pp.96-102)、基本的には、人と状況とがそれぞれ独立に行動に影響を及ぼすのではなく、相互に影響し合って影響を及ぼすと考える。さらに、それまで結果とみなされてきた行動が個人や状況に及ぼす影響を考慮する考え方もある。

新相互作用論の立場からパーソナリティを定義したものにEndler(1983)の定義がある。

パーソナリティとは、人が自分自身および環境と相互作用する際に見られる首尾一貫したやり方である。(Endler, 1983, p.179)

この定義は、伝統的なパーソナリティ理論の定義と明らかに異なっている。まず、パーソナリティを行動の原因とはみなしていない。「やり方(manner)」を行動と見れば、むしろ、行動そのものがパーソナリティということになる。ただし、“やり方”とは、個々の行動ではなく、個人の多くの行動から抽出されたスタイルや

パタンのようなものを指している。そのため、Allport(1937)の定義にあるような実体性も伴わない。

また、個人差の問題にもまったく言及していない。ただし、「首尾一貫した(coherent)」という言葉によって、安定性や持続性を含意しているとも見られる。首尾一貫性は、同じ行動がくり返し出現するという意味での一貫性(consistency)とは区別され、異なる行動であっても予測可能な何らかの法則性が認められる場合に用いられる(Krahé, 1992 堀毛訳編, 1996, pp.21-22)。

ところで、この定義において、パーソナリティはどこに位置づけられるのであろうか。パーソナリティを行動のスタイルとした場合、行動が生起する状況に存在すると見られることもできる。しかし、状況があっても行動主体となる個人が存在しなければ、行動も起こりえない。したがって、比喩的な表現を用いれば、“個人と状況との間”に存在すると言うこともできるかも知れない。

ただし、ここで問題とされるのは、個々の行動ではなく、それらを一般化した結果得られた行動のスタイルやパタンである。とすれば、状況を超えて持続的に存在する行動主体の内部に位置づけられるという考え方もできる。しかし、そうすると、もはや行動のスタイルというよりも、行動の原因であり、伝統的なパーソナリティ理論と同じ立場に立つことになる。

もう1つの考え方は、多くの行動からスタイルやパタンを抽出した個人、つまり、観察者の内部に位置づけられるというものである。首尾一貫性も観察者の認知的な活動によって見出されるものである。つまり、観察者が存在しない限り、パーソナリティは出現し得ないことになる。しかし、だからといって、パーソナリティが観察者の中に存在すると言えるのであろうか。もし、これを認めるとすれば、「殺人犯の凶悪さは検察官や裁判官の中に存在する」という主張にもつながる。このような主張は、常識的に考えればかかげたものと思われるが、ここでは結論を保留し、第4節で再び検討することにする。



### 2-3 社会的構築主義

社会的構築主義(social constructionism)は、1970年代にあらわれた考え方である。日本では「社会構成主義」という訳語があてられることもある。Burr(1997)によれば、ポストモダン思想、BergerとLuckmann(1966)らの知識社会学、Mead(1934)のシンボリック相互作用論などの流れをくんでいる。現在、社会的構築主義者は、社会学や心理学を含む、社会科学・人文科学の広い領域で活動している。

Burr(1995)は、「社会的構築主義の立場を特定すると言える唯一の特徴は、存在しない」と述べている(Burr, 1995 田中訳, 1997, p.3)。しかし、社会的構築主義が「事物は社会的に構築される」という主張を前提としていると見れば、おおよその全体像が理解されるであろう。「事物」とは、世界に存在するとわれわれがみなす、あらゆる“もの”と“こと”を指す。「社会的」というのは、社会過程、つまり、人間同士の相互作用に基づくことを意味する。そして、「構築」はもちろん“作る”ことであるが、むしろ、少々乱暴だが、“でっちあげる”と置き換えると理解しやすい。つまり、「われわれの世界のあらゆる“もの”と“こと”が、人間同士の相互作用によってでっち上げられる」という前提を持っていると見ることができる。

このような主張は、常識的なものの見方とはかけ離れたものである。例えば、道に落ちている石は、人間の相互作用によって作られたものではなく、地球物理学的なプロセスによって生まれたと考えられるであろう。しかし、私の目の前にある石は、「イシ」という名称を持ち、その下にあるアスファルトとは区別され、それを手に取れば道具や武器として機能するものである。このような石の“意味”は、地球物理学的なプロセスからではなく、言語、歴史、科学といった人間の相互作用のプロセスから生じる。そして、われわれの世界は意味を持つ事物で構成されている。まったく意味を持たないものを、われわれは認識することができない。このような点を考慮すると、社会的構築主義の前提も一概に否定することはできない。

このような立場から見れば、当然、パーソナリティも社会的な構築物である。これは、われわれが「パーソ

ナリティ」と呼んでいるものがその人物に自存的に内在する“本質”的な特徴などではなく、誰かによって意味づけられたものだということを意味している。

それでは、社会的構築主義においてパーソナリティはいかなるものとして位置づけられるのであろうか。Burr(1996)は、以下のように述べている。

…「パーソナリティ」の概念とは、自他が行なう物事を理解しようとするために、われわれが日々の生活で使う考え方なのだ、…(Burr, 1995 田中訳, 1997, p.33)

これに類似した見解は、Hampson(1988)の記述にも見られる。

パーソナリティもまた社会的な人工物である。われわれは、隠れたパーソナリティ特徴を推定するために、それを使って行動に意味や意義を付与する。(Hampson, 1988, p.9)

これらの記述にしたがえば、パーソナリティは、観察対象となる個人に内在する実体ではなく、むしろ、観察者が持っている“理論”のようなものを指していることになる。われわれは、このような“理論”を用いて、自他の行動を意味づけることになる。例えば、「彼は内気だ」というパーソナリティ判断は、彼が他者と会話をしないという事実に対し、「彼が他者と関わることが嫌いだからだ」という説明を与える。つまり、パーソナリティは、対象人物の行動を意味を持った、理解可能なものにするのである。

ただし、この“理論”に対象人物の正確な行動の意図が反映されている必要はない。というのも、パーソナリティの目的は、対象となる人物の意図をその都度正確に見抜くことではなく、対象人物、そして、世界を安定して意味づけることだからである。したがって重要なのは、対象となる行動とその人物の以前の行動とを矛盾なく意味づけることである。

それでは、このような“理論”はどのようにして生み出されるのであろうか。1人の人物は、日々、様々な行動をしている。パーソナリティ研究者であれば、これらの行動をデータとして詳細に収集し、それらを統合的に説明できるような理論を作り上げようとするで

あろう。しかし、たとえ優れたパーソナリティ研究者であっても、このような理論を作り上げることは容易ではない。しかも、ここで想定されている観察者とは、普通に日常生活を送る人々のことであり、専門的な訓練を受けた科学者を指すわけではない。だとすれば、1人の人物が行なう多数の行動を矛盾なく説明することなど不可能としか思えない。

ところが、人々は、観察者として、このような作業を何の苦もなくやり遂げている。というも、むしろ、彼らが科学者ではないからである。科学者であれば、可能な限り正確にデータを収集し、データを歪曲せずに分析・解釈しなければならない。一方、普通の人々は、対象者とたまたま相互作用した際の経験の中から、気の向くままにデータを取捨選択し、とりあえずつじつまの合う説明を“でっちあげれば”よいのである。既存の“理論”と矛盾する行動が観察された場合には、それを無視することもできるし、「彼を誤解していたようだ」とか「こんな人だとは思わなかった」と言って自分の“理論”を修正することもできる。あるいは、「彼は人が変わってしまった」と対象者のパーソナリティが変化がしたことにすることもできる。

人々が自他のパーソナリティを構築する目的は、伝統的なパーソナリティ理論と同じように、行動を予測することにあるようにも思える。しかし、パーソナリティが構築される過程は、前述のように恣意的であり、十分な予測力を期待することはできない。それではなぜパーソナリティが必要となるのかと言えば、Burr(1995)が指摘するように、自他を意味づけるためである。意味づけるという行為自体が、自らの世界と自己を構築し、維持する営みなのである。

### 3 パーソナリティと同一性

本節では、パーソナリティと同一性との関連を検討し、同一性に焦点を当てたパーソナリティ概念を提示する。しかし、その前に、パーソナリティの語源となった“ペルソナ(persona)”について考察を加える。

#### 3-1 ペルソナ

前節でも述べたように、Allport(1937)は自らのパーソナリティの定義を作るにあたって、それまでのパーソナリティ概念を詳細に検討している。彼は、この作業をペルソナの概念の検討から始めている。

「ペルソナ」は、もともとはギリシャ劇に使われた演劇用の仮面を意味するが、紀元前100年頃にローマの俳優によって取り入れられた(Allport, 1937 詫摩他訳, 1982, p.22)。この仮面を意味する言葉が紀元前1世紀には、少なくとも4つの意味で用いられていた。Allport(1937)は、これらの4つの意味を以下のように論理的に敷衍できるとしている。

- (a) 外面的容姿(真の自分ではない)
- (b) 劇のなかで演技者が演じる性格または役割
- (c) 特別な個人的資質を有する人間
- (d) 権威と威厳

(Allport, 1937 詫摩他訳, 1982, p.24)

そして、彼は、自らの定義を(c)の意味の延長線上に位置づけている。

しかし、Allport(1937)によって除外された(a)(b)(d)の意味が、パーソナリティ概念と無関係なわけではない。例えば、(a)の延長線上には、Mayの「その人のパーソナリティを決定しているのは、刺激としての個人に対してなされた他人の反応である」という定義も存在する(Allport, 1937 詫摩他訳, 1982, p.34)。このように、Allport(1937)の定義は、ペルソナに由来する多くのパーソナリティ概念を統合したものではない。彼は、これらのパーソナリティ概念と比較対照することを通じて、自らのパーソナリティ理論を明確化したと見るべきであろう。

Allport(1937)は、Jungの“ペルソナ”を(a)の延長線上に位置づけている。Jung(1928)はペルソナについて以下のように述べている。

ペルソナとは、「ひとりのひとが、何ものとして現れるか」ということに関して、個人と社会との間に結ばれた一種の妥協である。(Jung, 1928 松代・渡辺訳, 1984, p.57)

もちろん、Jung(1928)自身は、ペルソナを個人のパーソナリティの等価物と見ていたわけではない。ペルソナは、ひとつの仮象であり、二次的現実には過ぎず、本来的な個性はペルソナの背後に存在している(Jung, 1928 松代・渡辺訳, 1984, pp.57-58)。

しかし、Jung(1928)のペルソナの説明を見ると、われわれが「パーソナリティ」と考えているものと、大きくかけ離れたものではない。われわれは、それがたとえ自分の本来的な個性ではなくとも、“何者か”として社会の中に存在する。その際、「妥協」という言葉に表現されているように、社会と個人の間には、合意が形成されており、顕著な対立や争点は存在しないことになる。つまり、自他が共に認めるその人物の姿ということになる。これをその人物のパーソナリティとみなすことにそれほど問題があるとは思えない。これに対し「それは本当のあなたではない」と異議を唱えるのは、占い師か心理学者ぐらいのものであろう。

ところで、倫理学者の和辻哲郎もペルソナから人格に到る意味の変遷に言及している(和辻, 1963, pp.293-294)。それによると、まず仮面から劇中の人物(dramatis personae)という意味が生じ、さらに、人間生活の役割を指すようになる。人は、社会において、それぞれ役割を持っており、これには為すべきことが伴っている。つまり、人は、この為すべきことを為す、行為の主体ということになる。このようにして行為の主体、権利の主体としての「人格」という意味が生じるとある。

これは、Allport(1937)の言う(b)の流れから、パーソナリティ概念を説明したものと言える。Allport(1937)は、ペルソナを付けた俳優に焦点を当て、パーソナリティ概念を説明しようとしたが、和辻(1963)は、劇中の人物の延長線上にパーソナリティ概念を位置づけていることになる。

### 3-2 ペルソナと同一性

上記のように、ペルソナとパーソナリティとの関連については諸説がある。ここでは和辻(1963)のように、ペルソナと劇中人物との関係から再検討してみる。

そもそもなぜ芝居において仮面が使われるように

なったのであろうか。おそらく2つの理由が考えられる。1つは、舞台上の人物と劇中人物との対応をとるためである。劇中人物に想定される顔つきと俳優の顔つきが異なる場合、観客は脚本に表現された物語を十分理解できなくなる可能性がある。しかし、それらしい仮面を被ることで、どのような顔つきの俳優でも劇中人物を演ずることが可能となる。また、ポピュラーな演目であれば、観客は仮面をただで劇中人物を同定することができることになる。

もう1つの理由は、同一の劇中人物を芝居の最初から終わりまで指し示すためである。劇中人物は、劇中で様々な発言や行為を行ない、他の劇中人物の行為や発言を見聞きする。観客は、このような劇中人物の経験を記憶して、物語を理解している。ただし、多くの場合、劇中人物は1人ではない。したがって、観客は、劇中人物ごとに経験を整理して、記憶していかなければならないことになる。そのためには、今舞台にいる劇中人物と以前舞台にいた劇中人物が同一であることを示す必要がある。もちろん、仮面を被らなくても、俳優の顔つきから劇中人物の同一性を知ることは可能である。しかし、顔つきの類似した俳優がいる場合、あるいは、特殊なケースとしては俳優が途中で交替した場合には、混乱を招く可能性がある。その点、仮面は変化しない。また、それぞれ特徴の異なる仮面を用意することで、劇中人物同士を区別しやすくすることもできる。

これらの理由は、ペルソナが劇中人物に対応する記号として機能していることを示唆している。Saussure(1949)の用語を借りれば、ペルソナを“シニフィアン(signifiant)”と見ることもできよう。シニフィアンは、言語記号であれば音声部分に相当する。ただし、この音声は、物理的な性質から捉えられたものではなく、形相的なもの、あるいは、人間の知覚によって捉えられた“ゲシュタルト”と言ってもよい。そのため、高い声であっても低い声であっても同じ単語として受け取られるのである。Saussure(1949)は、シニフィアンの差異(différence)が言語体系を成立させると考えていた。これに倣えば、ペルソナの差異が劇中の世界を成立させていることになる。

Saussure(1949)の理論では、差異が重視されるが、差異と表裏一体の関係にあるのが同一性(identité)であり、これが差異を裏側から支えている。同一性とは、シニフィアンが実質的差異を超えて、形相的に同一とみなされることである(丸山, 1985, p.284-285)。例えば、「あ」という文字は、たとえ筆跡が異なっても「あ」とみなされる。ペルソナは劇の進行中に変化することがないため、1つのペルソナに関して実質的差異はほとんど生じない。その結果、同一性はより容易に生じることになる。言い換えれば、ペルソナは、劇中人物の同一性を強調するための手段、さらには、登場人物間の差異を強調するための手段として機能していることになる。

現実の世界においても、劇中と類似した状況が展開されている。ここにも多くの人物が登場し、それぞれが自らの役割を演じている。ただし、ここには純粹な意味での観客はいない。われわれは登場人物であると同時に観客でもある。

ここでペルソナの役割を果たすのは、個人の顔ということになる。ところが、顔は、表情によって刻一刻と変化しているため、厳密な意味では同一性を持たない。したがって、ペルソナと対応するのは、顔そのものではなく、そこから表情などの“実質的”な変化を取り除き、“形相的”な性質だけを残したものである。これが個人の“相貌”である。われわれは、他者の顔から相貌を抽出し、それに基づいて他者を同定している。同様に、個人の身体的な特徴も、場合によってはペルソナの役割を果たす。さらに、ペルソナを個人を指し示すシニフィアンと考えるのであれば、名前やニックネーム等の呼称もペルソナと言えるであろう。

いずれにしても、これらのペルソナは同一性を持ち、常に特定の個人を指し示すことになる。われわれは、他者に関する様々な知識をこのペルソナのもとに整理し、他者を理解しているのである。

### 3-3 意味としてのパーソナリティ

それでは、パーソナリティはどのように規定されるのであろうか。上記のペルソナの考察から順当に考えれば、パーソナリティとは、シニフィアンとしてのペ

ルソナに対応するシニフィエ(signifié)と言えるであろう。つまり、ペルソナに対応する“意味”に相当する。確かに、ある人物に関する知識(e.g., 属性、特徴、エピソードなど)は、相貌や名前に対応して記憶されており、相貌や名前を見たり聞いたりした時に想起される。例えば、「山田一郎」という名前から「～社の営業部長」「外向的で活発」「大学時代にはラグビー部に所属していた」というような知識が想起される。とりあえずこれらを山田一郎氏のパーソナリティの一部とみなすことは可能であろう。

ところが、このような知識をSaussure(1949)の言うシニフィエと見ることは若干の問題がある。シニフィエとシニフィアンとは表裏一体の関係にあり、両者で1つのシーニュ(signe)を成しており、意味はシーニュに内包されている(Saussure, 1949 小林訳, 1972, pp.160-161.)。そして、シニフィエは、隣接する他のシーニュとの差異によって制限されている。つまり、シニフィエの範囲は他のシーニュとの関係で明確に規定できることになる。ところが、ペルソナから想起される知識は、とりとめがなく、想起する状況の違いによっても様々である。このようにシニフィアンとの間にルーズな結合しか持たないものを、シニフィエと見ることはできない。

むしろ、これらの知識それぞれが独立したシーニュであり、ペルソナと関連づけられていると見る方が自然である。つまり、シーニュの中に意味が内包されているのではなく、シーニュの意味は、常に他のシーニュに依存していると見るのである。このようなシニフィエを含まないようなシーニュを「表徴」と呼ぶことにしたい(岩熊, 2001, p.48)。われわれの世界(われわれがそれぞれ主観的に構築した世界)は、無数の表徴が相互に結びついたネットワークとみなされ、各表徴は、それ自体の中に意味を内包しているのではなく、ネットワーク内の結節点として、ネットワーク全体によって意味づけられている。別の言い方をすれば、ネットワーク内における位置づけに基づいて、各表徴は特定の意味を担うことになる。

さて、このような視点に立った場合、パーソナリティはどのようなものとみなされるのであろうか。パー



ソナリティとは、その人物のペルソナを中心に広がる、多数の表徴のネットワーク構造とみなすことができる。このネットワークは、全体的なネットワークと重なり合っており、ペルソナは間接的にはすべての表徴と結合していることになる。ペルソナは、他の表徴と同様に、世界全体によって意味づけられている。したがって、パーソナリティとは、ペルソナとネットワーク全体との関係性、換言すれば、その人物の世界との関わり方を指していることになる。

実際、パーソナリティの要素と考えられるものは、すべてその人物と世界との関係を記述したものである。例えば、「外向的」という性格は、その人物が外界と積極的に関わろうとする傾向を意味している。また、「まじめ」は、その人物が規範を遵守し、任務を怠りなく遂行する傾向を指すが、規範も任務も世界の構成要素である。さらに、役割、能力、態度も、すべてその人物と世界の他の構成要素との関係を指し示している。裏返して見れば、他者のパーソナリティを理解することは、その人物と世界を構成する他の要素とを関係づけることであり、世界を構築する営みの1つということになる。

### 3-4 パーソナリティと同一性

上記のような考察をまとめると、パーソナリティを究極的に成立させているものは、ペルソナと言わざるを得ない。ある人物のパーソナリティをわれわれが認識しているかどうかは、結局、その人物のペルソナがネットワーク上に存在するかどうかで決まる。われわれが他者の人物の名前や相貌といった何らかのペルソナを認識した時点で、つまり、ペルソナの表徴がネットワーク上に成立した時点で、初めて、その人物は“人格”としてわれわれの前に立ち現れるのである。言い換えれば、われわれが他者の同一性を見出した時点で、パーソナリティは成立するのである。

しかし、他者の中に見出される同一性は、ペルソナの同一性だけではない。他者は「ヒト」「人間」といった生物としての同一性、「男性」「女性」といった性的な同一性、「子供」「若者」「中年」「老人」といった年齢に関わる同一性など、様々な同一性を体現している。観察者

は、他者をどのような同一性のもとに見るかによって、他者に異なる意味づけをすることになる。目の前にいる他者において“人間”としての同一性が成立すれば、その他者は他の人間と全く等価な存在として意味づけられることになる。例えば、通勤電車の中で隣に立っている他者は、われわれが特別な関心を抱かない限り、単なる人間として、そして、他の人間と交換可能な存在として、意味づけられるのである。

言い換えれば、われわれが他者の中にペルソナを見出し、その同一性のもとに他者を捉えるということは、われわれがその他者を他の誰とも異なる独自の存在として認めるということである。そして、パーソナリティとは、そのような独自性を支える意味構造ということになる。客観的に考えれば、誰もが独自性を持った、他の人間とは交換不可能な存在である。しかし、われわれは、実際に出会うすべての他者に対してこのような独自性を付与しているわけではない。むしろ、われわれが日々すれ違う何十、何百という他者は、“単なる人間”“単なる男性／女性”という交換可能な存在として現れては消えていく。われわれは、このような無数の他者の中の、ごく限られた一部の他者に対してのみ、独自性を付与するのである。そして、このような独自性を持った他者とは、われわれにとって“意味を持った”他者である。つまり、われわれが継続的に相互作用する他者、われわれの利害に影響を及ぼす他者、あるいは、われわれが何らかの理由で関心を持った他者である。このように意味を持った他者がペルソナを持つことになる。

ところで前の議論を振り返ってみると、ペルソナが成立することが、パーソナリティの成立の要件であった。しかし、ここでは、他者がペルソナを獲得するには、他者がわれわれにとって何らかの意味を持っている必要があるとしている。つまり、ペルソナとパーソナリティ(意味)は、トートロジー、あるいは、“にわとりと卵”の関係になっているようにも見える。しかし、この関係はトートロジーではなく、両者が同時に成立することを意味している。

意味を表徴のネットワークと考えた場合、シニフィアンとなる表徴に先行して、シニフィエに相当する一

群の表徴が存在しているかのように見える。しかし、シニフィアンが成立した時点ではじめて、それらの表徴が1つのまとまりを成し、シニフィアンの意味を担うようになるのである。結果的に言えば、Saussure(1949)が言うように、シニフィアン(ペルソナ)とシニフィエ(パーソナリティ)とは表裏一体の関係を成しており、どちらかだけで成立することはないということの意味している。両者は、相互依存的に支え合っていると見るべきであろう。

まとめると、われわれが“パーソナリティ”とみなすものは、その人物が担っている意味、つまり、われわれがその人物に付与した意味ということになる。ただし、この意味は、あくまでもその人物のペルソナの同一性のもとに成立しており、他の人物とは交換不可能である。そして、この意味こそがペルソナを支え、結果的にその人物の同一性を支えていることになる。以上のような考察の結果を定義の形で示せば次のようになる。

パーソナリティとは、ある人物の同一性(ペルソナ)のもとに成立し、その人物の同一性を支える意味である。

この定義は、社会的構築主義の視点をかかり取り入れているが、同一性に焦点を当てている点の特徴と言える。

#### 4 パーソナリティ概念をめぐる諸問題

ここでは、前節までの考察で得られたパーソナリティ概念に基づき、社会的構築主義の視点を中心に据えて、パーソナリティ概念に関わるいくつかの問題について検討する。

##### 4-1 パーソナリティの安定性と継続性

第2節で触れたように、伝統的なパーソナリティ理論においては、パーソナリティには安定性と継続性があるとされている。しかし、実際には、パーソナリティが変化することも否定できない。そのため、Child(1968)の「多少なりとも安定した」といった記述に見

られるように、曖昧な表現が定義にまで用いられることになる。

Allport(1937)のようにパーソナリティを生物物理学的な実体と考えた場合、その基底に想定される個々の神経組織は、刻一刻と変化しており、恒常性は持っていない。しかし、これはパーソナリティに限らず、他の物理的実体にも当てはまることである。例えば、われわれの目には恒常的に見える岩石であっても、原子や電子のレベルで見れば変化し続けている。しかし、石の中で原子と原子との距離は一定に保たれており、結果的に石は恒常的な物体に見える。つまり、物体が呈する恒常性は、基底レベルの恒常性に基づいたものではなく、その上位にある構造の恒常性によるものということになる。

ただし、対象の中には様々な構造が併存しており、その中から何らかの構造を選択する際に、恣意性が存在する。星空の中にかなる星座を見出すかに恣意性があるのと同じである。物理学者や化学者であれば、物性と強く関連する構造に注目することになる。一方、パーソナリティ研究者が説明しようとしているのは、安定的・継続的に現れる個人の行動、あるいは、行動パターンである。したがって、それらを説明するための構造を見出そうとすることになる。話の順序としては、パーソナリティが安定性や継続性を持つのではなく、安定性・継続性を持った構造がパーソナリティとみなされるということである。つまり、パーソナリティの安定性・継続性は、ペルソナの同一性を強化する必要性から生じているのである。

伝統的なパーソナリティ理論がパーソナリティ変数だけで行動を説明しようとしたのに対し、新相互作用論では、行動をパーソナリティ変数と状況変数の両者の関数と見る。その結果、行動の変動や変化の原因は状況変数に帰属することが可能となるため、パーソナリティを、むしろ積極的に、継続性・安定性を持ったものとみなすことができる。一方、社会的構築主義は、パーソナリティを観察者が他者の行動を理解するための意味づけあるいは“理論”と見る。その際の観察者の目的は、自らの世界を安定したものとすることにある。したがって、そこから生み出されるパーソナリ

ティが継続性と安定性を持つことは言うまでもない。

安定性や継続性は、同一性を前提として成立する。そもそも同一性のない事物間では、安定性も継続性も論じられることはない。つまり、パーソナリティの安定性・継続性の基底には、同一性が存在しているのである。通常、ペルソナの同一性の上に行動の安定性・継続性が見出されることによって、パーソナリティが成立することになる。その一方で、安定性や継続性がペルソナの同一性を強化する役割も果たしている。

しかし、行動の安定性・継続性そのものは、パーソナリティを成立させる必要条件ではない。それ故、「不安定なパーソナリティ」「気まぐれな性格」といった表現が存在するのである。しかし、これらの表現には、「不安定さの継続」「行動が安定して予測不可能である」といった意味での継続や安定が含意されている。これは、行動レベルでの不安定性がマクロレベルでの安定性・継続性に吸収されることを示唆している。

パーソナリティの安定性の問題は、パーソナリティという概念が何のために存在するかということと深く関わっている。一般的には、パーソナリティは行動を説明するためのものと考えられてきた。しかし、上記のいずれの立場においても、個人の安定性や継続性を見出すこと自体が、パーソナリティ概念の暗黙の目的になっているとも言える。他者も自己も、われわれの世界を構成する重要な要素である。もし、自己や他者が刻一刻と変化する雲のような存在だとすれば、われわれの世界全体も雲のように移ろいやすく、つかみ所のないものとなる。その結果、世界の意味、そして、われわれ自身の意味も失われていくであろう。つまり、われわれが他者や自己のパーソナリティを理解することは、世界を有意義なものにするために必要不可欠な営みなのである。

#### 4-2 パーソナリティの存在性格と所在

「パーソナリティはどこに存在するか?」という問いに対しては、理論的な立場の違いによって異なる見解が示されている。伝統的なパーソナリティ理論は個人の内部に存在すると主張する一方で、新相互作用論にはパーソナリティを個人と環境との間に位置づける

ような見方もある。さらに、社会的構築主義は観察者の内部に位置づけているようにも見える。

このような見解の相違は、パーソナリティをどのような存在と見るかということと関連している。伝統的なパーソナリティ理論は“行動の原因となる生物物理学的な実体”、新相互作用論のEndler(1983)の定義では“行動のスタイル・パターン”、社会的構築主義では“行動を説明するための理論”というように、各理論におけるパーソナリティの存在性格はそれぞれ異なっている。

ところで、筆者が第3節で示した定義では、パーソナリティを“その人物の同一性を支える意味”としている。“行動スタイル・パターン”や“行動を説明するための理論”は、個人の同一性を確立・維持するために為された意味づけの結果であり、これらを“意味”とみなすことができる。

それに対し、“生物物理学的な実体”は、本来、認識とは独立に存在するものであり、これを“意味”とみなすことはできない。ただし、伝統的なパーソナリティ理論において、このような実体が発見され、直接観察されているわけではない。あくまでも仮説として、「そのような実体が存在するはずだ」と主張しているに過ぎない。したがって、伝統的なパーソナリティ理論におけるパーソナリティを額面通り“生物物理学的な実体”と見ることはできない。これは、あくまでも個人の中に想定された仮説構成体であり、研究者の頭の中にある認知的構築物に過ぎないということになる。さらに言えば、これは行動、あるいは、個人を意味づけるために生み出された“意味”だと言うこともできよう。

話をパーソナリティの所在の問題に戻すと、結局、“意味”をどこに位置づけるかという問題に帰結する。われわれは、記憶、イメージ、思考といった認知的活動の結果を「頭の中に存在する」と見る傾向がある。事物を意味づけることも認知的活動であり、“意味”も頭の中に存在するとされることになる。これを突き詰めれば、知覚自体も認知的活動であり、結局、われわれの経験する対象のすべてがわれわれの頭の中に存在することになる。

哲学者の廣松(1988)によると、このような内在論は近代の認識論の主流であるが、最終的には行き詰まり、独我論に陥ることになる。知覚像を頭の中に位置づけた場合、その知覚像を見る“小人”が必要になり、結局は認識のメカニズムを説明できない(廣松, 1988, pp.37-38)。内在論が認知的構築物を頭の中に定位するのは、それが脳の活動によって生じているという理由からである。しかし、これが認められるのであれば、「知覚は刺激によって生じるのだから、知覚像は刺激の源泉に存在する」という主張も同様に成り立つ。実際、知覚主体自身は、知覚されたものが脳の中にあるなどとは思っていない。あくまでも、知覚対象は自分の外部に厳然と存在していると確信している。少なくとも、これを錯認とするだけの十分な根拠はない。廣松(1988)も、「知覚は、意識内部ならざる、知覚風景的空間内部のあれこれの定位置に“結像”する」と述べている(p.38)。つまり、知覚像は、身体の外部(場合によっては内部)にある刺激の源泉に位置づけられるのである。

廣松(1988)は、知覚が成立する際、知覚所与が「所与以上の或もの=所識」として覚知されると言う(p.47)。知覚所与は、“刺激”と置き換えても良い。一方、所識は、まさに“意味”のことである(廣松, 1988, p.47)。これをパーソナリティに適用すれば、ペルソナを知覚所与、所識をパーソナリティに対応させて考えることができる。厳密に言えば、ペルソナは、既にゲシュタルト化されているため、純粋な所与ではなく、所識を含んだものと見るべきである。しかし、結局のところ、ペルソナとパーソナリティの両者は、ペルソナの存在する場所に存在することになる。つまり、目の前にいる人物のパーソナリティは、その人物の相貌を中心とした身体の場合に位置づけられる。これは、われわれの日常的な感覚とも合致する。

ただし、パーソナリティが対象者の存在する場所に位置づけられるといっても、伝統的パーソナリティ理論が説くように、パーソナリティが対象者内に生物物理学的実体として自存すると主張しているわけではない。ペルソナを持った対象者は、観察者の認知作用によって意味づけられ、ペルソナの存在する場所に、

パーソナリティとして立ち現れるということである。

#### 4-3 パーソナリティ研究の目的

第2節でも述べたように、パーソナリティ研究の重要な目的の1つは、行動を予測することである。特に、伝統的なパーソナリティ理論は、パーソナリティを行動の決定要因とみなし、パーソナリティから行動を予測しようとする。しかし、詳細に検討してみると、予測には2つの側面が含まれている。1つは個人の行動を正確に予測することであり、もう1つは個人の行動を広範囲にわたって予測することである。両者は、常に両立するものではなく、場合によっては背反の関係になることもある。

伝統的なパーソナリティ理論は、少数のパーソナリティ特性や類型から、広範な行動を予測することを目指している。例えば、Allport(1961)は、習慣(e.g., 歯磨きの習慣)がせまい限られた決定傾向であり、もっと広い習慣体系である特性(e.g., 清潔さの特性)の中に織りこまれると述べている(p.345)。つまり、1つの特性を把握することで、多くの習慣や行動を予測できることになる。また、Eysenck(1998)の“パーソナリティの階層モデル”にも同様の主張が見られる(p.29)。これは、「類型」を頂点とし、多数の「個別反応」を最下層としたピラミッド構造として示される。最下層の「個別反応」はその上位にある「習慣的反応」にまとめられ、さらに、「特性」「類型」へと順次まとめられていく。この階層モデルは、上位に行くほど要素の数が減るため、最上位の類型は多数の個別行動を包摂する。結果的には、類型や特性の把握によって、広範な個別反応を予測できることになる。

予測の精度を優先するのであれば、むしろ、習慣から個別反応を予測する方がはるかに効果的である。それにも関わらず、より抽象的な特性や類型の把握に焦点が置かれるのは、「広範な行動を包摂した抽象的なものがパーソナリティの核心である」という暗黙の前提が存在しているためとも思われる。言い換えれば、このような抽象的な概念によって個人のパーソナリティを統合的に説明することが、伝統的なパーソナリティ理論の目標となっていると見ることもできよう。



伝統的なパーソナリティ理論の予測精度の低さは、Mischel(1968)の批判を招くことになった。この批判を契機に登場した新相互作用論は、パーソナリティ変数に加え、状況変数も用いる。行動に影響を及ぼすのは、客観的・物理的な状況ではなく、行動主体によって把握された主観的・心理的な状況である。したがって、状況を把握する行動主体の認知的な性質が重要性を帯びることになる。結果的には、新相互作用論は、状況変数、個人内の認知的変数、動機づけの変数を組み合わせて行動を説明することになる。これに伴い、研究の焦点は、パーソナリティそのものから行動主体を含んだ状況全体にシフトすることになった。つまり、行動主体が状況をどのように認知し、それにどう反応し、さらに、それによって状況がどう変化するかということが研究の焦点となる。

一方、社会的構築主義は、ある人物のパーソナリティからその人物の行動を予測しようとはしない。また、行動を説明するための新たなパーソナリティ理論を構築しようとしめない。むしろ、人々が既に持っている“パーソナリティ理論”を捉えようとするのである。これは、社会的構築主義が、意味づけられる対象よりも意味づける主体に焦点を置き、人々が他者や自己を意味づける過程、すなわち、パーソナリティの構築過程に関心を持っているためである。

以上のように、背景となる理論が異なれば、パーソナリティを捉える視点が異なり、研究目的さえも異なる。対象者を劇中人物に喩えれば、伝統的なパーソナリティ理論の目的は、劇中人物が多く場面を通じて示す一般的な行動傾向を捉えること、あるいは、芝居全体に一貫して表れる劇中人物の姿を捉えることである。つまり、劇中人物が、善人なのか、悪人なのか、働き者なのか、怠け者なのか、といったことを捉えようとしている。それに対し、新相互作用論は、各場面における劇中人物の行動を、場面や劇中人物の性質から説明することを目的としている。その際、劇中人物が状況をどのように見ているかを推定し、それに基づき、行動をより詳細に予測するのである。

一方、社会的構築主義は、劇中人物が他の劇中人物や自分自身からどのように見られているかに注目す

る。見る側と見られる側の視点を入れ替えれば、各劇中人物が劇中の世界をどのように意味づけているかに関心を持っているのである。つまり、社会的構築主義の関心は、世界を主体的に意味づける人々なのである。パーソナリティは、彼らが行なった意味づけの結果に過ぎない。パーソナリティは、それ自体が研究の目的ではなく、世界が意味づけられる過程を理解するための手がかりに過ぎない。しかしながら、自己と他者は世界の最も重要な要素である。その意味づけの過程を知るとは、構築された世界を理解する上でも特に大きな意味を持つ。

## 5 おわりに

本稿では、パーソナリティに関する理論を概観し、特に社会的構築主義の立場からパーソナリティ概念の検討を行なった。ここでは、まず、その内容を振り返ってみる。

本稿で取り上げたのは、特性論を代表とする伝統的なパーソナリティ理論、一貫性論争を機に現れた新相互作用論、そして、認識論的な視点を重視する社会的構築主義である。それぞれの理論は、パーソナリティに対して“行動の原因となる生物物理学的実体”“行動のスタイル・パターン”“行動を説明するための理論”といった異なる位置づけを与えている。

ところで、パーソナリティの語源となった“ペルソナ”は、本来、演劇で用いられた仮面を意味する。これとパーソナリティとを結びつけているのは“同一性”である。ペルソナは劇中人物の同一性を維持する機能を持つ。相貌や名前は、日常生活において同様の機能を果たしており、ペルソナと呼ぶことができる。パーソナリティは、このようなペルソナを持つ“意味”と見ることができる。パーソナリティは、ペルソナのもとに成立し、ペルソナの同一性を支える機能を果たす。

パーソナリティに関わる問題の1つとして、まず、パーソナリティの安定性や継続性がいかに維持されるかという問題がある。結論を言えば、パーソナリティが安定性や継続性を持つというよりも、安定性・

継続性を持った構造が結果的にパーソナリティとみなされていると見るべきである。つまり、パーソナリティの安定性と継続性は、ペルソナの同一性を強化する必要性から生じているのである。ペルソナの同一性が失われれば、われわれの世界の意味も失われることになる。

パーソナリティの所在は、パーソナリティの存在性格の捉え方と相関している。結局、パーソナリティは、自存的な実体ではなく、認識主体による意味づけの結果である。しかしながら、パーソナリティを認識主体の中に位置づけるべきではない。このような内在論は、最終的には行き詰まることになる。パーソナリティは、認識主体の中に存在するのではなく、ペルソナが存在する場所に立ち現れるのである。

パーソナリティを研究する目的は、理論的な立場の違いによって異なる。伝統的なパーソナリティ理論は、個人の広範な行動を統一的に説明することを目的にしている。新相互作用論は、状況とそこにいる行動主体との関係を解明することを目的にしている。一方、社会的構築主義の関心は、行動主体ではなく、むしろ、その行動主体を意味づける認識主体である。社会的構築主義において、パーソナリティは、それ自体が研究目的ではなく、世界が意味づけられる過程を知るための手がかりとして重要なのである。

ところで、意味とは一体何なのであろうか。第3節では表徴のネットワーク構造と述べたが、意識内容に即して言えば、空間的・時間的な構造あるいはパターンとすることができる。例えば、物質の性質、物の機能や効能、生物の習性などはどれも、これに該当する。当然、これには表徴の同一性を保証するゲシュタルト構造も含まれる。ただし、構造やパターンは、第4節で述べたように、自存的に事物に内在するものではなく、認識主体が主体的に見出すものである。“意味づけること”とは、このような主体的な営みなのである。

したがって、パーソナリティも、観察者によって見出される空間的・時間的な構造・パターンとすることができる。まず、行動自体が空間的・時間的な構造を持っている。また、感情、動機、意志なども、状況要因とともに

に構造として捉えられる。さらに、これらが反復されれば、時間的なパターンも持つことになる。パーソナリティはこのようなものを要素として成立している。観察者がこのような構造やパターンをペルソナの上(場合によっては、内部、背後)に見出す時、独自性を持った個人が出現するのである。

意味と同一性との間には、強い相互依存関係、あるいは、表裏一体の関係がある。意味は、同一性をもった対象にのみ付与される。一方、同一性は意味によってのみ保証される。したがって、他者や自己の同一性は、パーソナリティによって保証されていることになる。他者が“誰か”として存在し続け、自己が“私”であり続けるためには、自己や他者による意味づけが必要不可欠なのである。

## 引用文献

- Allport, G. W. 1937 *Personality: A psychological interpretation*. New York: Holt. (詫摩武俊・青木孝悦・近藤由紀子・堀 正 訳 1982 パーソナリティ－心理学的解釈－新曜社)
- Allport, G. W. 1961 *Pattern and growth in personality*. New York: Holt, Reinhart & Winston. (今田 恵 監訳 1968 人格心理学 上・下 誠信書房)
- Berger, P. & Luckmann, T. 1966 *The social construction of reality: A treatise in the sociology of knowledge*. New York: Anchor Book. (山口節郎 訳 1977 日常世界の構成－アイデンティティと社会の弁証法－新曜社)
- Burr, V. 1995 *An introduction to social constructionism*. London: Routledge. (田中一彦 訳 1997 社会的構築主義への招待－言説分析とは何か－川島書店)
- Child, I. L. 1968 Personality in culture. In E. F. Borgatta & W. W. Lambert (Eds.), *Handbook of personality theory and research*. Chicago: Rand McNally.
- Eysenck, H. J. 1998 *Dimensions of personality; with a new introduction by the author*. Brunswick, N.J.: Transaction Publishers.
- Hampson, S. E. 1986 *The construction of personality*.

- 2nd ed. London: Routledge.
- 廣松 渉 1988 新哲学入門 岩波書店
- 岩熊史朗 2001 意味の構造 文化情報学:駿河台大学文化情報学部紀要, 8(2), 45-58.
- 岩熊史朗 2002 同一性について 文化情報学:駿河台大学文化情報学部紀要, 9(2), 19-32.
- Jung, C. G. 1928 *Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewussten*. Zurich: Rascher. (松代洋一・渡辺 学 訳 1984 自我と無意識 思索社)
- Krahé, B. 1992 *Personality and social psychology: Towards a synthesis*. London: Sage. (堀毛一也 編訳 1996 社会的状況とパーソナリティ 北大路書房)
- Lewin, K. 1935 *A dynamic theory of personality*. New York: McGraw. (相良守次・小川 隆 訳 1957 パーソナリティの力学説 岩波書店)
- 丸山圭三郎(編) 1985 ソシユール小事典 大修館書店
- Mead, G. H. 1934 *Mind, self, and society: From the standpoint of a social behaviorist*. Chicago: The University of Chicago Press. (河村望 訳 1995 デューイ＝ミード著作集6 精神・自我・社会 人間の科学社)
- Mischel, W. 1968 *Personality and assessment*. New York: Wiley. (詫摩武俊 監訳 1992 パーソナリティの理論 -状況主義的アプローチ- 誠信書房)
- Saussure, F. de 1949 *Cours de linguistique générale*. Paris: Payot. (小林英夫 訳 1972 一般言語学講義 岩波書店)
- 和辻哲郎 1963 面とペルソナ 和辻哲郎(著)安倍能成・天野貞祐・谷川徹三・金子武蔵・古川哲史・中村元(編集) 和辻哲郎全集 第十七巻 岩波書店, pp.289-295.

## Personality and Identity,

IWAKUMA Shiro

[Abstract] This paper overviews personality theories, and discusses the concept of personality, especially from the viewpoint of social constructionism. Personality is viewed as "a biophysical substance that causes behaviors" in traditional personality theories, "styles or patterns of behaviors" in modern interactionism, and "a theory that explains behaviors" in social constructionism. The "Persona", which is the origin of personality, maintains the identity of a character in a drama. One's facial features and name can be seen as the persona in daily life. If the persona is thought of as a sign, personality corresponds to its "meaning" and maintains its identity. The stability and duration of a given personality arise from the need to reinforce the identity of the persona. If the identities of the personas of others are lost, the meaning of the world in which we live is also lost. Personality, which corresponds to meaning, exists not in the subject but in his/her external environment where the persona exists. The goal of traditional personality theories is to explain the wide-ranging behaviors of specific individuals, while that of modern interactionism is to understand the relationships between a situation and the person who exists within it. Social constructionism focuses on the process of constructing personality as a clue to the process of defining the world. Furthermore, the personalities of self and others maintain their identities.

[Key Words] personality, identity, meaning, social constructionism, traits theory, modern interactionism